

研究紀要

第35号

—設立40周年記念号—

研究紀要

第35号

—設立40周年記念号—

公益財団法人

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

上川名式と花積下層式の交流 —縄文時代前期初頭における文様描出方法の統一化について—	鈴木 宏和
中矢下遺跡A区出土石槍の再検討 —縄文時代前期後半の石槍との比較—	水村 雄功
縄文石器を対象とした型式設定における一試論 —縄文時代前期の押出型石匙を対象に—	入江 直毅
特殊器台弧帯文の施文方法	小林 萌絵
方形周溝墓の研究とキョウダイ原理をめぐって	福田 聖
埼玉県新井堀の内遺跡における埋蔵銭	上野真由美
近世町屋における鍛冶関連遺物の廃棄状況について	高橋 杜人
栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について	水村 雄功
近世遺跡出土針葉樹材の簡便な保存処理方法について	井上 真帆 野中 仁
古代から教室へのメッセージ事業について	藤田 栄二 田中 広明 堀内 紀明

2021

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



写真1 ベルギー ボッホ・フレール社

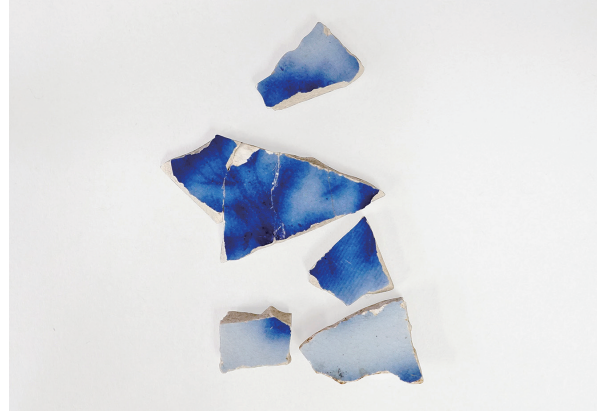


写真2 イングランド ドーソン社

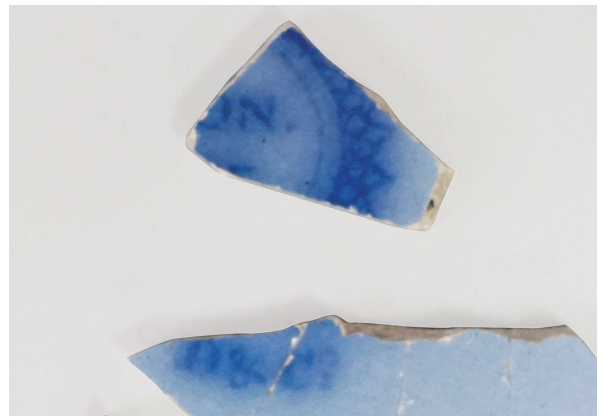


写真3 スコットランド
ジョン&マシュー・パーストーン・ベル社



写真4 イングランド ジョンソン・ブラザーズ社

(水村 栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について)

目次

巻頭図版

序

上川名式と花積下層式の交流 ……………	鈴木 宏和 (1)
—縄文時代前期初頭における文様描出方法の統一化について—	
中矢下遺跡A区出土石槍の再検討 ……………	水村 雄功 (21)
—縄文時代前期後半の石槍との比較—	
縄文石器を対象とした型式設定における一試論 ……………	入江 直毅 (35)
—縄文時代前期の押出型石匙を対象に—	
特殊器台弧帯文の施文方法 ……………	小林 萌絵 (55)
方形周溝墓の研究とキョウダイ原理をめぐって……………	福田 聖 (65)
埼玉県新井堀の内遺跡における埋蔵銭 ……………	上野真由美 (91)
近世町屋における鍛冶関連遺物の廃棄状況について ……………	高橋 杜人 (107)
栗橋宿跡出土のヨーロッパ産陶磁器について ……………	水村 雄功 (123)
近世遺跡出土針葉樹材の簡便な保存処理方法について ……………	井上 真帆 野中 仁 (147)
古代から教室へのメッセージ事業について ……………	藤田 栄二 田中 広明 堀内 紀明 (157)

方形周溝墓の研究とキョウダイ原理をめぐって

福田 聖

要旨 戦後の日本考古学は、夫婦を軸とした個別経営をもとにする共同体の成長が社会の発展であるという独自の範型を作り出した。「世帯共同体」を方形周溝墓の造墓集団とする説もその一つである。完存した瓜生堂遺跡2号墓の存在もあり、居住単位である夫婦を造営の軸とした「家族墓」であるとする評価が定まった。そこでは、長男により系譜が継承される父系制社会が前提であった。

その中で、歯冠計測法を用いた古墳被葬者の親族関係の復元をもとに、田中良之が提唱した基本モデルⅠ～Ⅲは、古墳時代は全体を通して双系が基本であり、段階を経て父系へ移行していくという、従来の古墳時代の社会像の転換を迫る画期的なものであった。中でも前期の同一古墳や古墳群で血縁関係の男女ペアによる埋葬が行われていたとするキョウダイ原理の提唱は、それまで信じられてきた父系制を覆すものであった。方形周溝墓の研究において、キョウダイ原理は、まず大庭重信、中村大介・秋山浩三らによって導入されたが、当初はそれまでの共同体論をクランなどの出自集団の概念で説明し直す傾向があった。藤井整の一連の研究は、従前の共同体論から離れ、新たな方向性を示すものであるが、造営単位に対する検討が尽くされていないため、不十分な側面がある。前田清彦、福田は造営単位がほぼ同世代であることを確認したが、それをもとにした計画性の検討や意義付けには至っていない。いずれにせよ、方形周溝墓の研究では、キョウダイ原理が充分検証されているとは言い難く、具体的な資料の検討を通して、その是非を含めて検証を始める必要がある。

1 はじめに

方形周溝墓は考古学の対象としては、最も新しい遺構の一つである。それでも命名以来50年が過ぎ、重要な研究は枚挙にいとまがない。

その研究史の中でも被葬者像や造墓集団についての研究は、戦後に発達した日本独自の共同体論に導かれた世帯共同体による「家族墓」とされていた段階から、人骨の検討をもとにした「集団墓」へと評価が移行しつつある。

その転換点となったのが、田中良之の歯冠計測法をもとにした基本モデルⅠ～Ⅲの提唱である(田中1996)。具体的には、同一古墳に埋葬される男女のペアが夫婦ではなくキョウダイであり、それが古墳時代を通じて行われ、遅れて父系制へと移行していくというものである。

当時前提となっていた夫婦を中心とした父系制の社会像の変更を迫る衝撃的なモデルの提唱であった。古墳研究では、その後清家章による修正を受けて、広く一般化しつつある(清家2010)。

しかし、方形周溝墓の研究においては、田中のモデル、特に密接に関係するキョウダイ原理について、提唱から既に25年の時間が経過しているにも関わらず、充分な検証も修正もなされているとは言い難い。

筆者は、現在群構成や出土遺物の検討をもとにした造営集団の推定を進めているが、現段階では、そのまま用いるわけにはいかないが、方形周溝墓の埋葬モデルとして、キョウダイ原理が最も妥当だと考えるに至った。そうであるならば、清家が行ったように、実際の資料の検討を通して吟味し、修

正する必要があるだろう。

しかし、その前提として、方形周溝墓の研究において、このキョウダイ原理が正面から取り上げられることは、何故かほとんど見られない。

それは、その有効性が十分に評価されておらず、検証のための準備すら整っていないためと考えられる。それは戦後発達した共同体論による「家族墓」という評価の強い影響とも思われる。いずれにせよ方形周溝墓の歴史的意義を検討するために、有効な方法を検証する準備を整える必要がある。

本稿は、田中によるキョウダイ原理提唱の前後を通じた研究の推移を整理し、これからの課題と展望を述べようとするものである。

2 「家族墓」としての方形周溝墓

(1) 唯物史観と父系制共同体

日本の考古学は、人文科学の一分野とされているため、その時の思潮の影響を大きく受けてきた。戦後、日本の人文科学の世界では、皇国史観への反省からマルクス主義的な唯物史観の影響を受け、個別経営をもとにした共同体の成長によって社会の発展を論ずる論説が主流となった。考古学においても、その思潮を色濃く反映した方法論や理論が生まれ、普及していった。

そうした歴史研究における研究動向と考古学の関係については、毎年特集される『史学雑誌』の「回顧と展望」を通読するとよく分かる。

現在の日本考古学がどのような経緯でこの形に至ったのかを、どのように考えるかは我々に課せられている大きな課題だが、それについては別に論じたい。

ともあれ、「唯物史観」の影響を色濃く受けた論説が考古学をリードしたのは間違いない。現在45歳を超える年齢層の研究者は、程度の差はあれ、学問の訓練段階から、そうした理論や方法論から多くを学んでいる。

そして、その唯物史観の前提となったのが、文

献で明らかであった、古代中国王朝の父系制社会という社会組織である。

本稿のテーマであるキョウダイ原理を立ち上げた田中良之の主張の柱は、古墳時代の社会を双系を基本とするものであったため、大きな批判を浴びた。

それを受けたためか、田中は日本考古学、特に古墳時代において、父系制社会がどのように前提となるに至ったかを整理している（田中 2004）。

小林行雄の大王墓の男系世襲説（小林 1955）以来、古墳時代研究では当たり前となっていた父系による権力継承という図式は、小林が説を提起した当時の歴史研究の前提としての「父系制社会」との擦り合わせを意図した時代の要請によるものであった。

田中はそれを、明治以降に造られた父系制のイエ制度という現代社会の常識によって導かれた思い込みと相俟って、長く継続された観念的な推測であるとして退けたのである。

田中は別に、日本考古学における社会組織論が、第二次世界大戦後に、独自の科学としての装いを持とうとしたために、中止半端な形でマルクス主義、エンゲルスの共同体論を導入した経緯を整理している（田中 2004）。

日本考古学の発展に大きく寄与した独自の体系である「共同体論」は、モノの学問であることを重視しすぎたために、新進主義的な海外考古学や、日本古代史の研究成果とも大きく齟齬をきたした独善的な体系になってしまったのである。

(2) 求められた科学的な方形周溝墓の説明

遺構としては最も新しく認定された方形周溝墓は、部族社会である縄文時代と、父系的な首長制社会、階級社会である古墳時代をつなぐ弥生時代の墓制として一躍脚光を浴びた。一方、日本考古学の当時の思潮は、前述のように、所謂唯物史観による遺構・遺物の科学として社会を描き出そうとする傾向が顕著であった。このシーンにおいて、

この新しい墓制は、そうした「科学的な」発展的図式の中で説明されていくようになる。

1970年代前半までの方形周溝墓研究の最初の10年は、鈴木敏弘を中心とする原始墓制研究会によって、研究の経緯をまとめた研究史研究の一つの金字塔である『原始墓制研究』1～5にまとめられている(原始墓制研究会 1973～1977)。

また、その後の経緯については、椛山林継・山岸良二による『方形周溝墓研究の今』(椛山・山岸 2005)に詳しい。

大塚初重、金井塚良一、近藤義郎らによる、方形周溝墓についての重要な研究が多いが、それについてはひとまず置き、別に論じたい。

ここで確認しなければならないのは、次章以降で述べるキョウダイ原理提唱の前には、方形周溝墓はどのような社会組織により、誰を埋葬するために造営されたと考えられていたのかという2点である。

(3) 瓜生堂遺跡の被葬者像

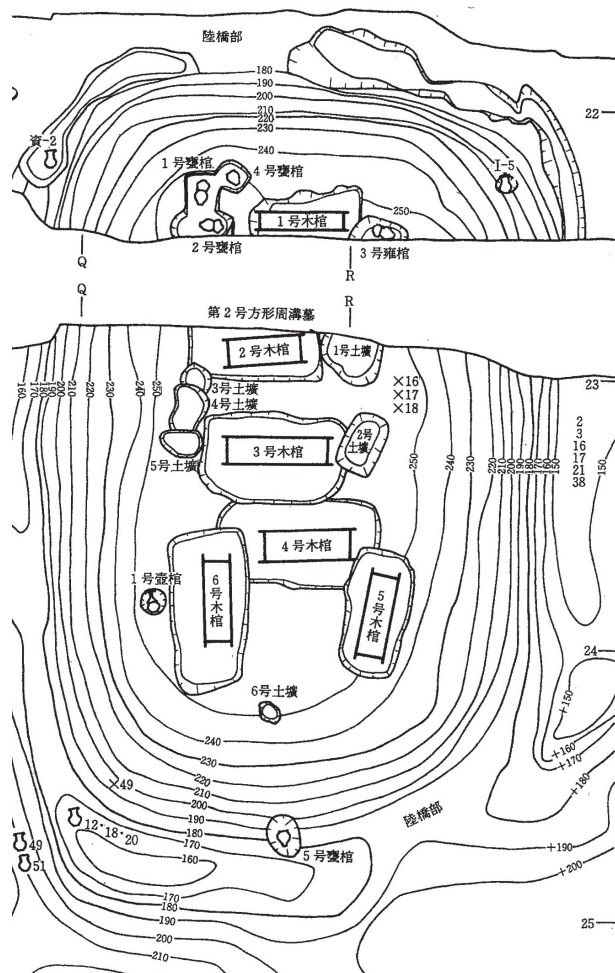
1980年代以降の方形周溝墓の被葬者像を検討する上で、強い影響力を与えたのが、方形周溝墓の典型とされた大阪府東大阪市瓜生堂遺跡2号墓である(第1図、瓜生堂遺跡調査会 1981)。

1971年～1974年に調査されたこの周溝墓は、厚い砂に覆われて、方台部の盛土がほぼ完存し、埋葬施設として6基の木棺と6基の土器棺、6基の土壙が検出された。

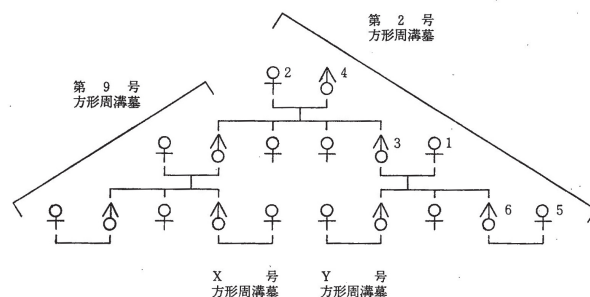
3～6号木棺の墓壙には重複関係が認められ、4号木棺が初葬墓であることが明らかになっている。これは後の大庭重信や藤井整の研究につながる重要な調査所見である。

木棺のすべてに人骨が遺存しており、性別が明らかになっている。

田代克己はこうした調査所見と軸方向をもとに、木棺の男女のペアを推定し、それを可能性として夫婦と見立てたのである。そして、この夫婦ペアを軸に、直系3代の夫婦とその子供たちとい



第1図 瓜生堂遺跡2号墓
(瓜生堂遺跡調査会 1981より転載)



第2図 瓜生堂遺跡2号墓被葬者の家族関係想定図
(田代 1982より転載)

う被葬者像を描いた(田代 1982 pp.380-381、第2図)。

更に、系譜が長子により継承されると推定し、それ以外の子供たちは独立して墓を営むとしたのである。

田代は瓜生堂2号墓の被葬者についての夫婦を軸とした図式に固執するつもりはなかったようだ

が、この完存した具体的な例による方形周溝墓は「家族墓」であるという推定が、長らく方形周溝墓を家族墓とする有力な根拠となっていたのである。

(4) 都出比呂志の研究

1970年代から1980年代は、前述のように方形周溝墓を対象とした数多くの論文が発表された時期である。学史的にも興味深いものが多いが、ここでは後の研究に決定的な影響を与えた都出比呂志の研究を代表的なものとして取り上げたい。

今更いうまでもなく、都出の一連の仕事が日本考古学の弥生・古墳時代の研究をリードしてきたのは間違いない。その多くの著作の中から、方形周溝墓の研究に大きな影響を与えた「農耕社会の形成」(都出1984)を取り上げる。

その中でも弥生時代の社会構成について、都出が提唱した「世帯共同体」という概念は、方形周溝墓の被葬者像の研究においても決定的な役割を果たした。

「世帯共同体」は、当時の調査例をもとに都出が抽出した1軒の大型住居跡と数軒のそれより小さな住居跡からなる「小集落」をもとにしている。改めて記述するまでもないかもしれないが、都出の世帯共同体によるその後の論説の基礎として、あえて取り上げたい。

現在では常識的であるが、都出は各々の住居跡を「一住居跡単位に炊飯と共食が行われた」「寝起と消費の基礎単位」(pp.135)とする規定から始めている。この住居跡を基礎単位として、小集落にみる住居跡間の関係を、「魏書」倭人伝の「有屋室、父母兄弟臥息異処」の記事をもとに、既婚者を核としてそれぞれの幼児とは共住する、父母の世帯、私の世帯、兄や弟の世帯の集団単位としたのである。そして、大型住居跡をその集団単位の核である家長世帯の住居として、小集落を「家長世帯を核と、その兄弟や父母の世帯をあわせた「複合家族」であり、「複数世帯からなる共同体

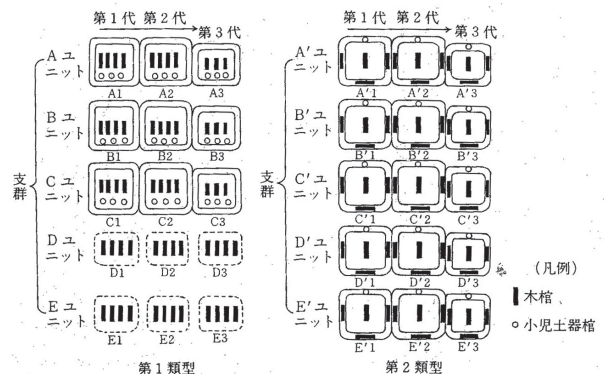
の意味において、世帯共同体と呼称」したのである(同 pp.136)。

この世帯共同体である小集落と大集落との関係を明らかにするために、氏は当時環濠集落と方形周溝墓群がセットとして調査され、所謂「倭国大乱」の時期の弥生時代の集落の典型とされた神奈川県横浜市の大塚、歳勝土遺跡を取り上げた(同 pp.137-138)。

まず、都出は歳勝土遺跡の小型のS 10号墓でも方台部に1~2体、「溝内の深い掘込を埋葬土壙」として四辺の周溝に各1体、これに小児棺である土器棺を加え、「計七体の埋葬」があると想定した。その上で「これらの人々が土器棺に葬られた乳幼児をも含む近親集団とすれば、ここでは一基の方形周溝墓は、竪穴住居跡の一棟に居住する一世帯に相当する家族墓」としたのである。既婚者とそれぞれの幼児からなる各住居跡と一基の方形周溝墓の埋葬を対応させたのである。

更に墓道や調査の所見をもとに「互いに連結しつつ時期を異にして築造された三基前後の方形周溝墓群を一つのユニットとして」、「このユニットを一世帯の二~三世代の累世的墓域」と仮定して、それが集まった支群を、世帯共同体と対応させた(第3図)。

ここに、方形周溝墓群の造墓集団が世帯共同体であるという造墓集団像が具体的に提出されたのである。夫婦を軸とした「夫婦原理」による「家



第3図 歳勝土遺跡のユニット推定図 (都出1984より転載)

族墓」の提唱である。

また、当時から国家成立の機縁として大きく取り上げられていた「倭国大乱」のような社会不安にも、住居跡が「寝起と消費の基礎単位」で、独立した単位であるため、社会的な動乱にも対応できたのだとする解釈が行われた（同 pp.139）。

この住居跡を独立した単位とする解釈が、この論文も含めたその後の都出の「小経営」をもとにした「個別経営による」共同体論へと結実していく（都出 1991）。

加えて、西日本の大集落における建物の機能的配置に階層性の可能性を見出し、更に瓜生堂遺跡等における周溝墓群と土壙墓群の併存によって階層差の存在を補強した（都出 1984 pp.139-141）。

合わせて、先の歳勝土遺跡をはじめとする東日本の遺跡には、建物の計画的配置や、周溝墓群と土壙墓群の併存例がみられないため、階層性が顕著でないとしている。

以上のように、都出はこの論文によって、①一軒の住居跡が一基の方形周溝墓に対応する、方形周溝墓は夫婦とそのコドモを単位とする家族墓である。②方形周溝墓の造墓集団は世帯共同体である。③墓地の構成から、畿内においては階層性がより明確に示されているという3点を主張したのである。ここでは、集落の実態に合わせた社会組織の復元に重きが置かれていた。

その後、この論文は都出の著作の一章となり、多くの補強的な加筆が加えられている（都出 1989）。

特に方形周溝墓については、①古河内湖周辺の大阪府安満、瓜生堂、池上などの東日本の同時期の集落をはるかに凌駕する集落には墓域が複数認められ、複数の集団があること、②大阪市加美遺跡のような巨大周溝墓は、一般の「方形低墳丘墓」とは区別された「首長親族の墓」であり、周溝墓群の内部にも強く階層差があったことの大きく2

点書き加えられた。その結果として、畿内の「階層分解」が東日本より早く進んでいたと評価するに至っている（同 pp.222-224）。

方形周溝墓の造墓集団は世帯共同体であるが、各々の造墓集団は階層差を持つものであり、畿内では首長墓が既に築かれ、階層分化が進んでいたという評価が変わった。氏のその後の個別経営である世帯共同体の成長による国家成立という立論の基礎として書き直したのである。

当初の居住単位をもとにした「世帯共同体」の構成が、1軒の大型住居と数軒のそれより小さな住居から構成される小集落であったため、方形周溝墓にみられる単位墓群の構成と対応関係が見られると考えたのは無理からぬ所ではあった。

しかし、その後の多くの資料から、方形周溝墓一基あたり7人とする人数の想定自体に問題があることも明らかになっている。つまり、そもそも世帯共同体を造墓集団とするこの立論そのものが、現在では基礎を持たないものになったのである。

そうした点からも、田中のキョウダイ原理の提唱がなくとも、早晚家族墓や世帯共同体を造墓集団とする想定は見直す事態になっていた筈である。

しかし、都出が描いた斬新な国家成立への理論的な道筋は、科学的な国家成立像を希求していた日本考古学が、まさに必要としていたものであった。その影響力は強く、長らく修正が続けられて一般化し、現在においても国家成立の説明として多くの場で用いられ、それにもとづく論考も多い。

一般化し通説となっているものからは離れがたいが、研究者である我々には、それは許されない。都出の仕事が弥生・古墳時代の考古学を牽引してきたのは間違いない。逆に学史的な意義を含めて、再評価する時期が来ているのではないだろうか。

（5）大村直の研究

都出が提唱した方形周溝墓の世帯共同体による造墓論が浸透していく中で、一貫して家族論を追求し、その造墓集団像を否定したのが大村直である。

大村直は、方形周溝墓とその造営主体とされる「家族」について、多くの論考をなしているが、そのエッセンスは『関東の方形周溝墓』所収の「ムラと方形周溝墓」にまとめられている（大村 1996 pp.349～364）。

同論は、夫婦を中心とする居住原理との対応も示しており、傾聴すべき部分が多い。

まず氏は、弥生時代中期の方形周溝墓群が「列をつくり整然と連続的に配置されており、墓域の設置から配列にいたる強い」規制の存在を指摘する（同 pp.354）。

大村はこの列状の規則的な配置を、系譜的な直系親子関係からなる家族によって連鎖的に形成されたとする見解に疑義を唱えた。まず、集落の形成において、遺跡が単系出自による集団編成を認定するに足るような連続性を持たず（同 pp.335）、住居跡の拡張によって集落成員の増員に対処する様相から、夫婦原理による「分居」ではなく、夫婦関係を越えた「血縁原理にもとづく緊密な集団原理」の存在を想定する（同 pp.359）。この原理により方形周溝墓群が形成されるとしているのである。

次に、未成人中心埋葬を行う一基単独埋葬の存在によって、その中心埋葬を家長とする「家長墓」説を否定する。朝日遺跡の「首長墓と考えられる大形の方形周溝墓ごとに、これを基点として中小の方形周溝墓群が形成され」、「首長墓の造営ごとに方形周溝墓列が断絶する」（同 pp.359）例などから、「親子関係を含む累世代間のつながり以上に、首長個人を基点とした、各々の世代のつながりが強調され」、「核家族的結合を横断した緊密な世代原理のもとに各列が構成される」（同 pp.359・360）としている。弥生時代中期の方形周溝墓群の規則的な配列が世代原理によるものであり、各列を血縁原理による紐帯を示すものとした。別に大村は、埋葬は近親者の死亡順に列を意識して連続して行われたとしている（大村

1989 pp.15）。

更に「各列が血縁原理によるものであるものとしても、出自集団あるいは「氏族制」の要件は備えていない」（pp.360）と指摘する。一方血縁関係による紐帯が強いため、婚入者が同一列内に埋葬されないとの仮定を、「一基単独葬」の理由と推定する。

後期の方形周溝墓群については、列状構成が崩れ、2～3基の小群が単位となる様相を、中期段階の「緊密な集団原理の弛緩」として、夫婦関係に基づく「居住原理」への移行と軌を一にするものだと評価している。

しかし、それを単純な発展段階とはせず、その例として本稿で検討対象とする広面遺跡や東京都八王子市神谷原遺跡を例として、「配列状況等Ⅱ期とは異なるものの、首長墓と考えられる大型の方形周溝墓を基点とした集合化」（同 pp.361）がなされているとして、居住原理と血縁原理が、場合、場合で強調されているとする。

後期以降の方形周溝墓群の評価については、詳しくは触れられていないが「家父長制的家族像」の否定に論調が傾いたために、この論考では曖昧なままになっている印象が強い。

この論考に代表される大村の一連の論考は、難解であるため、あるいは先駆的であったためか、あまり評価されているとは言い難いが、弥生時代から古墳時代前期の社会組織について、多くの重要な所見が含まれている。

特に、後の藤井の研究とも通ずる、規則的な列状の群構成が親子ではなく、夫婦を中心とした家族を横断する原理によってなされたとする見解は、歯冠計測という新たな方法なしに、夫婦ではない造営原理を見出した卓見である。

この大村の見解は、明らかに時代を先取りした先駆的なものであり、再評価すべきものと考えられる。

大村を含む各氏の 1990 年代までの検討では、

基本的に弥生時代中期までは列状構成、後期からは特定墓を中心としたブロック化、少数化が認められるとして、それが社会組織や階層、首長の成立と密接に関係すると説かれてきた。

具体的には、前者が部族社会的な造墓規則による群構成、後者が首長制社会への移行期の様相を示す群構成との評価である。

その被葬者については、大村が前述のように弥生時代中期の規則的な配列を世代原理によるものであり、各列を血縁原理による紐帯を示すものとして、家族墓、家長墓説に異論を唱えるほかは、中期までは家長墓、後期以降は首長に移行する過程としての、家長を超えた、いわば族長墓とする推定が一般的であったと言えよう。

特に断りがない場合が多いが、この族長、首長は父系である。近代以降の核家族の埋葬をイメージしているために、夫婦の同一墓、あるいは同一墓域への埋葬を原則としている。婚入者が同一墓域に埋葬されないとしているのは、前述のように大村のみである。

筆者も含めてだが、それまでの諸氏の論考は、都出が提唱した、父系の世帯共同体が造墓集団であるという著名な論説に導かれたものである。

しかし、方形周溝墓の調査例が増すにつれ、家族墓とする規定、様々な群構成などの様相を説明できないことが徐々に明らかになっていった。

3 キョウダイ原理の提唱

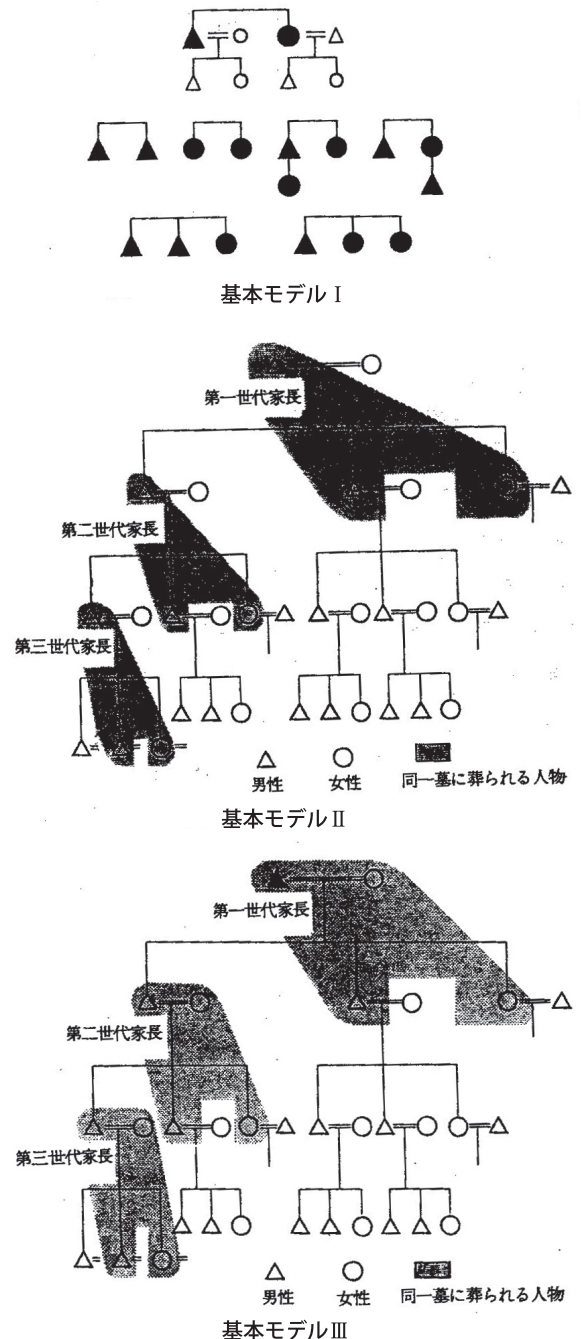
(1) 田中良之の研究

そうした理念型と実例の乖離が意識されはじめた頃、歯冠計測法をもとに古墳時代親族組織の問題に取り組んだ田中良之は、常識であった父系制社会の墓制としての古墳の造営とは大きく異なる埋葬原理を提示した(田中 1995)。

歯冠計測法そのものの是非については筆者に云々できる能力はないが、管見に触れる限りでは方法論的な瑕疵を問うような批判は見られない。

田中以降の人類学の研究成果も蓄積されているため、その有効性は高い。

田中は埋葬原理として、三つの基本モデルを示し、IからIIIへ変化するとした(第4図)。



第4図 田中の基本モデル(田中 1995 を一部改変)

田中は、古墳時代の中で、埋葬原理がIからIIIに変化するとして、双系制から父系制へ移行するとした。

基本モデルⅠは、同世代である血縁のキョウダイを原則とする埋葬で、初葬者に男女の区別はなく、双系である。〈キョウダイ原理〉

田中は、基本モデルⅠについて具体的に次のように説明する。

- ① 単数埋葬、複数埋葬ともに、初葬者は男女双方が含まれるため、双系である。
- ② 血縁のキョウダイが埋葬され、配偶者は含まれない。
- ③ 二世代の事例から、被葬者の選択は親との血縁関係が基準となる。
- ④ 同世代の男女のペアが基本であるため、現実のキョウダイから男女を一人ずつ選択すると考えられる。
- ⑤ 何らかの事情がある場合に、同性のキョウダイや2世代などの様々な変異型をとる場合がある。
- ⑥ 単数埋葬は、キョウダイから一人だけが選択される。
- ⑦ 首長墳から小円墳・箱式石棺まで共通して認められ、階層差はない。
- ⑧ 時期は弥生時代終末（3世紀代）から5世紀後半までと考えられる。

基本モデルⅡは、2世代が基本で、初葬者である成人男性とその子供の世代によるものである。初葬者は男性に限られる（5世紀後半から6世紀後半）。

田中は、基本モデルⅡについて、具体的に次のように説明する。

- ① 初葬者は家長である成人男性であり、父系である。
- ② 第2世代は、家長を継承しなかった家長の子どもたちである。いずれも配偶者は含まれない。
- ③ このモデルの被葬者は父系の血縁者と考えられる。
- ④ 現状では、横穴墓と箱式石棺に限られてい

る。

- ⑤ 時期は5世紀後半から6世紀後半と考えられる。

基本モデルⅢも2世代が基本で、基本モデルⅡの第1世代に家長の配偶者が加わり、初葬者が家長夫婦となるものである。〈夫婦原理〉

- ① 初葬者は家長である成人男性と、同世代の血縁関係にない女性で、その妻と考えられる。父系である。
- ② 第2世代は、家長を継承しなかった家長の子どもたちである。いずれも配偶者は含まれない。
- ③ このモデルの被葬者は、モデルⅡと同様の父系の血縁者に初めて配偶者が含まれるものである。
- ④ 現状では、横穴墓と横穴式石室に限られている。
- ⑤ 時期は6世紀前半から中頃以降にかけて以降と考えられる。

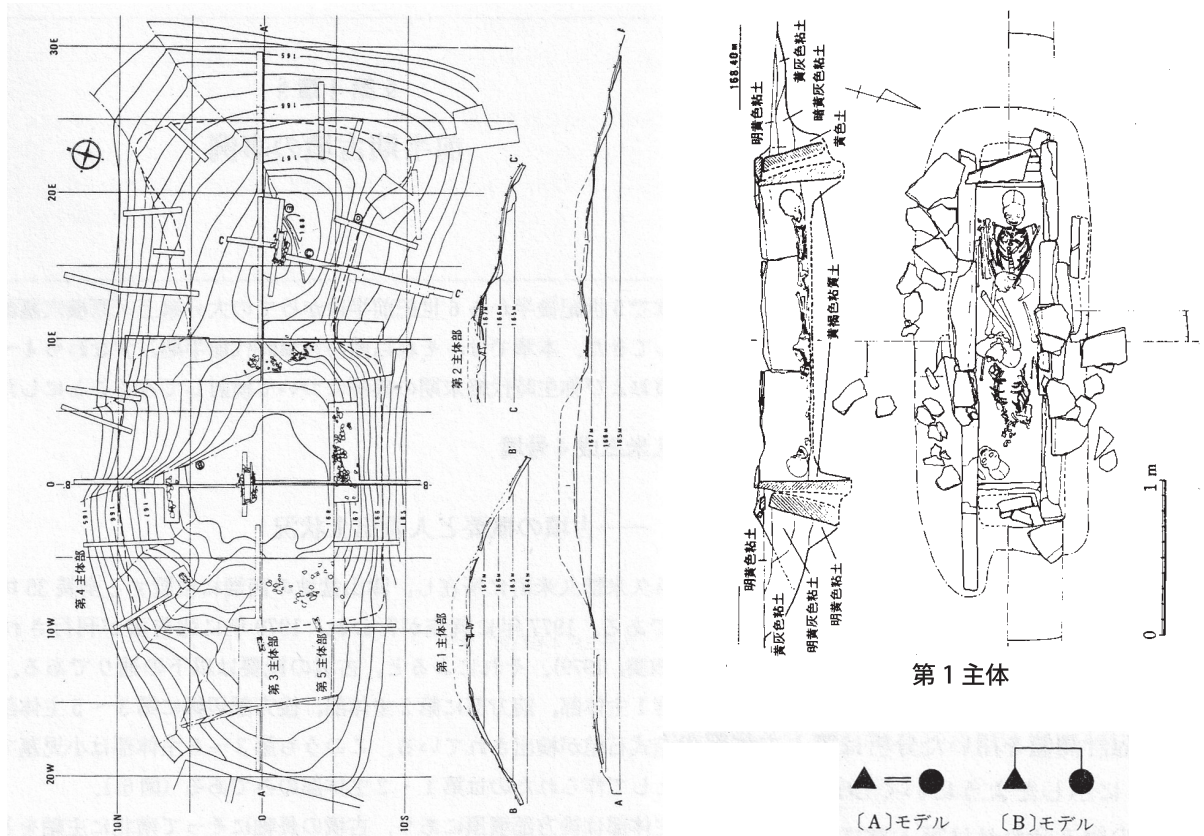
（田中同 pp.228-237）

基本モデルⅡ・Ⅲは父系制への移行過程を示すものだが、後述する清家章のように、急激な移行ではなかったとする異論も多い。この父系制への移行という構図は、田中がそれまでの古墳時代研究を無意識に尊重していた結果という可能性も考えられる。

田中の論の核心的な部分は、具体的な人骨の検討、特に歯冠分析法を用いた血縁関係の有無による「キョウダイ原理」の提示と社会組織が双系であるとの指摘にある。

その論拠が人骨という具体的な物質資料をもとにした、考古学的な論理展開として極めて正当な手続きによるものであるため、画期的で、衝撃を持って迎えられた。

結果としての「キョウダイ原理」のみが取り上げられる場合が多いが、その具体例の中には方形周溝墓の埋葬原理について多くの示唆が含まれて



第5図 久米光成4号墳（田中1995を一部改変）

いるため、やや詳しく見ていきたい。

例示された岡山県津山市（久米町）久米三成4号墳（岡山県1979）は全長35mの前方後方墳とされている（pp.107-111）。

墳丘からは箱式石棺5基が検出されている。同棺男女埋葬の第1号石棺は、後方部の墳長に設けられた中心埋葬施設と考えられる。

埋葬施設には、東西、逆向きの頭位をとる、所謂対置埋葬の状態、男女2体が埋葬されている（第5図）。第1号人骨は成年後半から熟年前半の男性、第2号人骨は成年の女性である。1→2号の順で埋葬されている。第1号人骨に、追葬による攪乱、乱れがないため、時期を隔てずに追葬されたと推定され、同世代と考えられる。

更に両者は歯冠計測により血縁関係が認められる。血縁関係がある同世代の男女のペアであるためキョウダイである。

以上が、同一石棺に埋葬された男女のペアがキョウダイであるという田中の説明である。同一

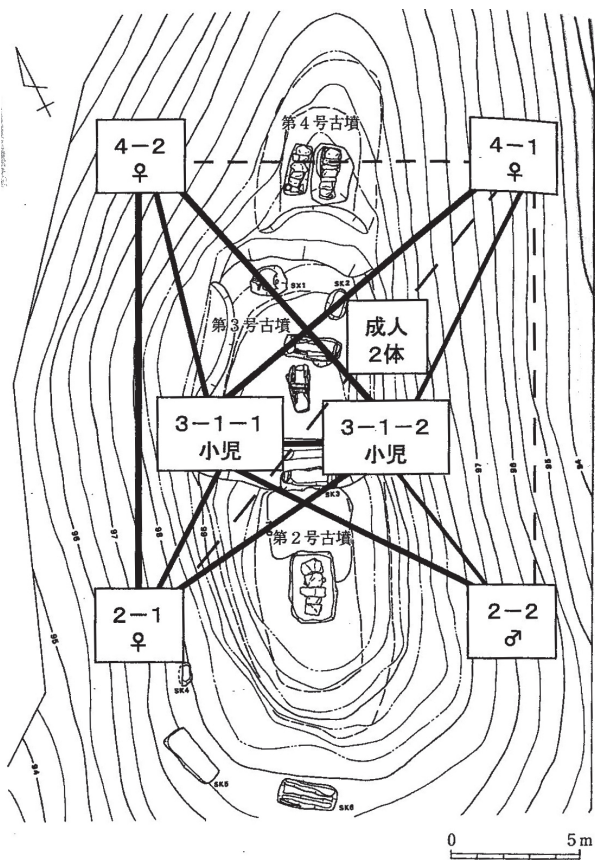
墳丘、埋葬施設に葬られた男女ペアがキョウダイである具体例である。

広島県府中市山の神古墳群（田中2006）は、丘陵頂部に造られた3基の方墳である。

いずれの古墳からも人骨が出土している。第2号墳からは壮年の男女（2-1・2号）が、第3号墳には7歳前後と9歳前後の小児（3-1・2号）が、第4号墳からは成年女性と老年女性（4-1・2号）の人骨が出土している。

人骨の性別、年齢と出土状況から、同世代の男女（第2号墳）、大人と子供2人の2世代（第3号墳）、成年女性と老年女性の2世代（第4号墳）の構成と、立地から2→3→4の築造順が推定されている。3基の出土土器が同一の時期と考えられるため、この築造順は親子孫の3代ではなく、同世代と考えられている。

この古墳の歯冠計測法による被葬者間の関係は、第6図に示されている3通りである。図の太線が推定される関係、細線が可能性のある関係で



第6図 山の神古墳群被葬者の親族関係
(田中 2006 より転載)

ある。まず3-1・2号の間、次に3-1・2号と2-1・2号の間、3-1・2号と4-1・2号の間、2-1号と4-2号の間に血縁関係が推定されている。また、2-1・2号間、4-1・2号間も血縁関係の可能性があるとされている。言うなればいずれの人骨間にも血縁関係が推定されるのである。

詳しい手続きは省略するが、土器の示す時期幅に親子ほどの年齢差を含む血縁者が収まる想定は、「これら3基がキョウダイ～イトコといった同世代の近親者を軸にし」(田中同 pp.110) た築造であると田中は推定した。また、各古墳はキョウダイにコドモが加わる組み合わせとしている。

山の神古墳群の例は、古墳時代前期に、数基単位の前期古墳で、同一世代の血縁者による造営が行われていた具体例として、方形周溝墓の群構成を考える上でも重要な成果と言えるだろう。

田中は別に、縄文時代から古墳時代までを通して、歯冠計測法による埋葬の変遷について述べているが、それについては別に述べることにする。

このキョウダイ原理の提唱には、画期的であるが故に、当初多くの批判があった。

前掲の、田代による弥生時代中期の瓜生堂遺跡2号墓における3組の男女ペア埋葬を3組の夫婦とする推定に始まり、近畿地方では弥生時代中期から父系制であったとの説が半ば定説になっていた。都出比呂志による双系は九州の地域性であるという指摘(都出 1989)をはじめ、多くの批判が寄せられた。

これらの批判は具体的な根拠を持たず、無意識に畿内の優位性を前提としたものが多い。

田中自身は、甲本真之の山口県豊浦町中ノ浜遺跡の検討方法を瓜生堂遺跡に用いた場合や、自身の福岡県の前田山遺跡の双系と考えられる例を引き、畿内のみ先進性を否定する(田中同 pp.231)。

現在では、後述の大庭の手続き等によって、瓜生堂遺跡の埋葬が夫婦を軸とする有力世帯という被葬者像は、婚入者を含まない出自集団によるものと転換されている。

また、古墳時代中期以降の、父系制への移行の時期や具体的な様相についても多くの批判があるが、方形周溝墓の埋葬方法の検討には影響がないため、本稿での詳述は避けたい。

田中のこの新しいモデルは、現在の弥生・古墳研究に大きな影響を与えている。方形周溝墓の被葬者像、造墓集団の研究においても、秋山浩三や藤井整の研究につながる大きな曲がり角になった。

また、この基本モデルIは、大村が示した被葬者像を具体的に示したとの評価も可能であろう。

夫婦を単位とする家族による独立性の高い個別経営を単位とする方形周溝墓の造墓活動という枠組みに対して、この後キョウダイ原理が新たな大

きな軸となっていくことが予想された。

しかし、残念ながら、筆者も含めて、田中のこの原理を十分に生かすことができなかった。

そうした中で自らも歯冠計測法を用いて、資料に取り組み、田中の議論を引き継いだのが清家章である。

(2) 清家章の研究

清家は田中の埋葬原理モデルを批判的に継承し、自らによる中小古墳の歯冠計測法による検討を加え、整理している(清家2010・2018)。

その中で、古墳時代の一般層の埋葬原理として、以下の5点を挙げた(清家2018 pp.56-57)。

- ① 古墳時代は前期から後期まで通してキョダイ原理の埋葬が主流である。
- ② 一基の古墳だけでなく、隣接する古墳の被葬者も血縁者である(柿坪中山古墳群・山の神古墳群・大正池南古墳群)。
- ③ 前期から中期までは初葬者にみられる男女の割合はほぼ同じで1対1である。これは双系的な埋葬原理といえる。
- ④ 後期以降は初葬者に占める男性の比率が増加する。しかし、女性家長の存在も一定程度存在する。したがって、父系化は完全達成されたとはいえ、父系に傾いた双系的親族構造が埋葬原理から復元される。
- ⑤ 夫婦原理の埋葬は一部に存在するが、普遍的な存在ではない。

この5点は、田中のモデルⅠの一般性を示すとともに、モデルⅡ・Ⅲに当たる父系制への移行は、傾向とできるほどで全面的には程遠いとしたのである。田中のⅠからⅢという時系列に異議を唱え、修正したのである。

清家は、田中のモデルに問題があるとの多くの批判に対し、問題があるならば、新たな資料や分析でそれを補い、修正すれば良いのだと断言し(清家同 pp.24)、実際にそうしたのである。逆に、田中のモデルは清家の修正付で有効と認められた

とも言えるであろう。

また、清家は田中のモデルの傍証、考古学的な検証として、副葬された装身具と人骨の性別の対応関係を整理した。鏃、甲冑は男性のみに、刀剣類は男女ともに副葬されるが、古墳時代前期では男性のみという対応関係を明らかにした(pp.59)。また、車輪石や石釧の出土位置が腕部の場合には女性という、副葬品の出土位置と性別の関係を明らかにした。人骨の存在例から副葬品との組み合わせを明らかにし、人骨が遺存しない場合にも性別が推定できるようにしたのである(pp.59-62)。性別の推定を可能にした画期的な研究と言えよう。

清家の修正によって、田中のモデルⅠは古墳時代の墓制研究の際に、必ず参照すべきモデルになったといえるであろう。清家が言うように、修正が必要ならば、その研究者の方法や論理によって行うべきであろう。

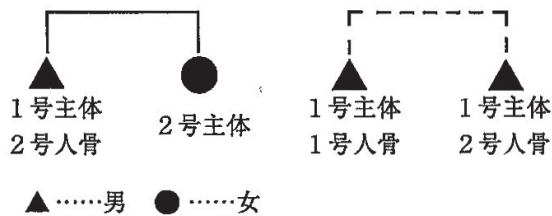
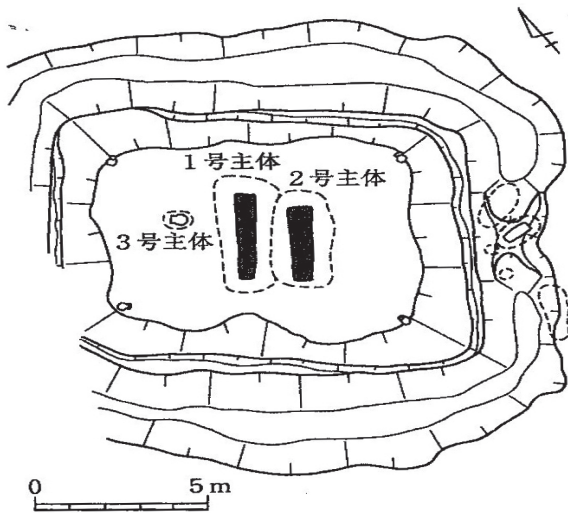
田中の研究同様に、方形周溝墓の造墓集団の検討の際にも大いに参照すべきものと考えられるため、清家が挙げた具体例を示しておく。

学史的にも著名な大阪府八尾市久宝寺遺跡の久宝寺1号墳は、方台部の復元長が12.5 m×10.5 mの方墳である(大阪府文化財センター2003)。方台部に0.7～0.8 mの盛土があり、中心埋葬施設が割竹形木棺であるため当時注目を集めた(第7図)。

典型的な多数埋葬であり、後述する大庭が言う空間占有型の方形周溝墓とあまり変わらない。ここでは、方形周溝墓、古墳のどちらかという問題は保留したい。

方台部には、この割竹形木棺(1号主体)、丸木舟の転用木棺(2号主体)、土器棺(3号主体)が設置されており、周溝内埋葬として木棺1基、土壙墓2基、土器棺墓2基が認められる。

方台部、周溝の双方から、布留1式期の土器が出土している。時期的なまとまりがあり、各埋葬



第7図 久宝寺1号墳の親族関係
(清家 2018 を一部改変)

は同世代と考えられる。

方台部の1・2号主体は、南北同一の軸方向で2→1号の順で重複している。1号主体の2体は、棺の南北両端に歯のみが遺存しており、対置埋葬が行われたと考えられる。

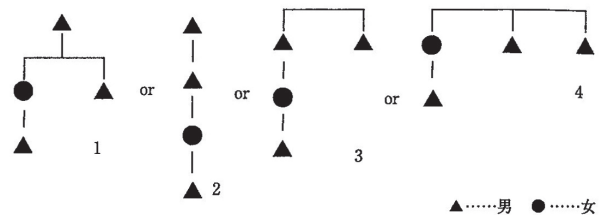
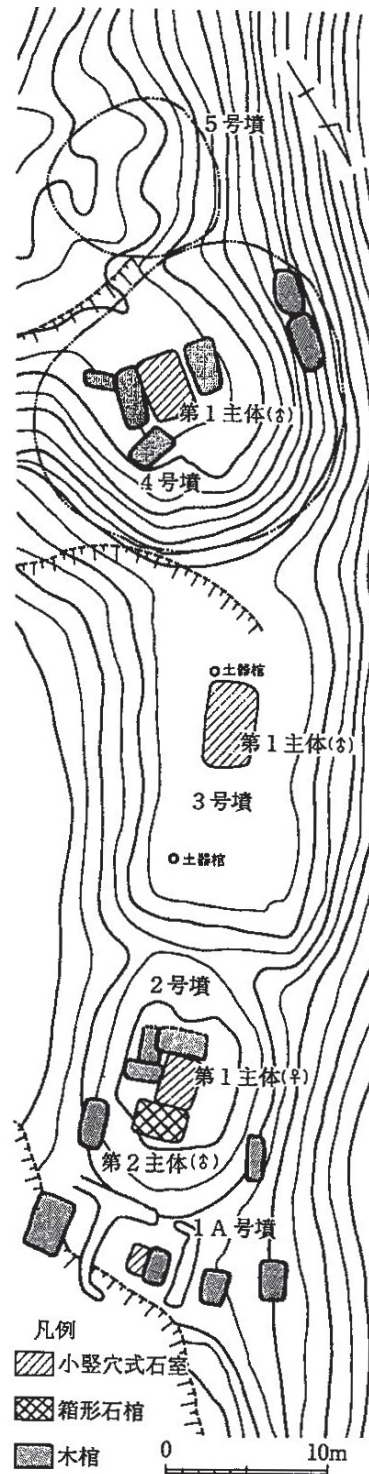
人骨は1号主体に2体（1-1・2号と仮称）、2号主体に1体（2-1と仮称）が遺存していた。

1-1号が25歳前後の男性、1-2号が18歳前後の男性、2-1号が18歳前後の女性と推定されている（安部・山口 2003）。

清家はこの3体の歯冠計測を行い、1-1と2-1の間に血縁関係が推定され、1-1と1-2の間にも可能性があったとした。

埋葬に時間幅がなく、年齢も近いため、3体はキョウダイ関係を推定している。

前述のように、これを方形周溝墓における事例と考えることも可能である。周溝内埋葬も含めて、今後詳細な検討が必要な事例である。



第8図 柿坪中山古墳群と親族関係モデル
(清家 2018 を一部改変)

また、清家は前期後半の兵庫県朝来市柿坪中山古墳群（山東町教育委員会 1978、第 8 図）の検討結果を示している（清家同 pp.35-40）。

3 基の古墳の主要埋葬施設である小竪穴石室から出土した 3 体（熟年女性（1 号）、壮年前半男性（3 号）、熟年男性（4 号））に血縁関係がある。2 号の箱式石棺から出土した若年男性（2 号）と 3 号人骨に血縁関係が推定される。つまり、古墳群の各古墳の被葬者は血縁関係を有し、その中に配偶者は含まれないのである。

数基単位の前期古墳の被葬者が、同世代もしくは 2 世代の血縁者であるという原則を示す例として、田中が挙げた山の神古墳群とともに注目される。

群構成の規模が前期の方形周溝墓群と同様であり、中小古墳と方形周溝墓との対応関係が予想される。

以上、田中、清家の研究によって、キョウダイ原理は古墳時代以前の墓制研究において、必ずその是非を検討すべきモデルとなった。

しかし、清家の修正が十数年の時間を要したように、個々人によるその検証は容易ではない。

手前味噌になるが、定説とも言うべき時代を導いてきた見解や理論を転換するには多くの時間を要する。

残念ながら方形周溝墓の被葬者像や造墓集団の研究においてもそれは同様である。

しかし、徐々に田中・清家のモデルを用いての研究が現れるようになる。

4 方形周溝墓の埋葬とキョウダイ原理

方形周溝墓研究では、田中の影響を受けた中村大介・秋山浩三（中村・秋山 2004）、大庭重信（大庭 2005・2007）らによって、部族社会の出自集団である社会組織であるリネージやクランを造墓集団とする主張が現れた。

前章末で述べた、研究の姿勢や視点の転換は、

例として挙げるのは失礼だが、大庭の研究の変化に良く現れている。

田中の後の研究については、藤井整の諸論文で、研究史として要領よくまとめられている（藤井 2017 pp.27-30 等）。

藤井は、この 3 氏の研究が、夫婦関係をもとにしない出自集団のような社会組織によって、都出の個別経営による共同体首長の成長を説明し直したもので、家族墓としての方形周溝墓という概念を転換するものではなかったと評価している。

しかし、長く所謂マルクス主義的なアジアの生産様式による発展的な図式を脱却できなかった方形周溝墓の研究史の上で、3 氏の研究はパラダイム・シフトとも言い得るような大きな転換点になったのではないだろうか。

(1) 大庭重信の研究

大庭は田中の研究の以前から、近畿地方で方形周溝墓の研究を進めてきた（大庭 1988 等）。

田中のモデル提示以降では、中期の階層構造を扱った「方形周溝墓制からみた畿内弥生時代中期の階層構造」（大庭 1999）が代表的なものである。この中で大庭は、後の近畿地方の研究に大きな影響を与えた埋葬施設配置の 3 型式を提唱した。

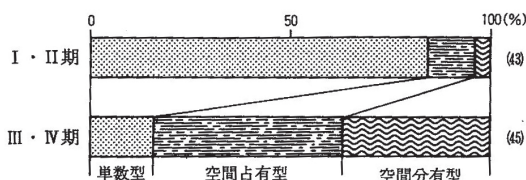
前提として、方台部の平面形は長方形とし、中心に埋葬される被葬者が、その長方形の空間を占有するとの評価によって、以下のように類型化する（同 pp.170-171、第 9 図）。

単独型：単独埋葬。埋葬施設は方台部の中心。方向は方台部の長辺に対して平行。

空間占有型：複数埋葬。埋葬施設は方台部の中心、最深部に設置。最古。方向は方台部の長辺に対して平行。

空間分有型：複数埋葬。埋葬施設は方台部の中心にない。方向は方台部の長辺に対して直交。

大庭は、それまで近畿地方では複数埋葬墓が基本とされていた常識に対して、中期前葉までは単



第9図 方形周溝墓の埋葬配列と時期変遷 (大庭 1999 を一部改変)

独型が大多数で、空間占有型が少数見られる状況で、単数埋葬が原則であることを示した。複数埋葬が一般的となるのは、中期中～後葉以降であり空間分有型もその時期から見られるものとした。それまでの複数埋葬から単独埋葬という、個人が階層的な成長を遂げるという図式を否定し、3類型が併存する意義を主張した。

その上で、この埋葬施設配置の型式と方台部の規模の大小の対応関係から、「中心の埋葬施設が明確化していた」(pp.173) 空間占有型が大型であると指摘した。

合わせて、中期後葉以降は赤色顔料が空間占有型でのみ使用される限定性を挙げる。

この両要素から、その中心埋葬施設の被葬者が階層的に優位としたのである。

加えて中期末には同一の周溝墓の複数埋葬で赤色顔料が見られる様相を優位集団の存在として評価し、「埋葬施設・墳丘規模・赤色顔料の使用という三点において、他と比べて優位な立場にある墓を上位階層墓と呼称した」(pp.176) のである。

空間占有型の複数埋葬や赤色顔料という特別な儀礼行為における道具立てをもって、中心埋葬施設の被葬者の階層的な高さや、上位階層墓を指差し直したのである。

いわば中期末の段階にそうした上位階層墓が成

立したとも言い換えられるであろう。

更に大型上位階層墓が、そのみで群構成を継続する場合(瓜生堂・亀井・城山)や独立した立地(星ヶ岳西・田能・長原)、墓地の限定性(加美)に、大型空間占有型の固定性や優位性を指摘する(pp.176～179)。

複数埋葬から単独埋葬という埋葬の限定性による階層化、その長の成長という図式と、空間占有型の大型墓の成立、大型墓の独立性の高さから集落内の階層化という図式を描き出したのである。個別経営をもとにした個人への権力の集中による階層化が、時期を追って進展するため埋葬施設が限定化し大型化するという図式と入れ替えたとも言い得るであろう。いわば図式を変えただけで、周溝墓の築造は、やはり階層化の進展の現れであると説明し直したのである。

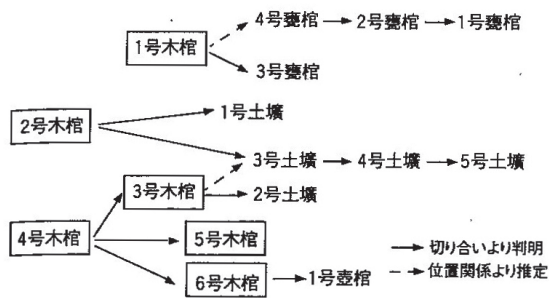
これが、藤井の批判するところと考えられる。

しかし、一方で、上位階層墓が周溝墓群内に留まる場合や、小規模な空間占有型の存在が単なる大型空間占有型の存在やその独立性のみでは説明できないとする。また、瓜生堂遺跡の空間占有型のみによる群構成に造墓集団を越えた集団差を予想する(pp.181)。「階層分化」を前提としながらも、単にそれのみでは説明しきれないのを、既に氏は自身で自覚的に指摘しているのである。

しかし、この段階では、クランやリネージのような形の出自集団をもとにした社会組織ではなく、あくまで共同体の階層分化の表れとして周溝墓築造が考えられているのは確かであろう。

その後の氏の考えのエッセンスは、考古学ジャーナルNo.534に掲載された「方形周溝墓の埋葬原理」にまとめられている(大庭2005)。

大庭は、方形周溝墓の完全な形の一つとされる大阪府東大阪市の瓜生堂2号墓の埋葬過程を、成人埋葬施設の切り合い関係と、それに伴う未成人の埋葬施設である土壙墓、小児墓である土器棺の共伴関係から復元した(第10図)。



第10図 瓜生堂2号墓の埋葬過程
(大庭 2005 より転載)

大庭が挙げるように、瓜生堂2号墓の被葬者間の関係性については、田代克己による前掲の3世代の夫婦説、大村直によるキョウダイ関係に基づく同一世代の複数の夫婦の集合説（大村 1989）の2つの代表的な説がある。

氏による埋葬過程の復元では、3段階目に9体もの成人・未成人の埋葬が行われている。そのため、これを直系の夫婦とそれに伴うコドモとするには無理があるため、大庭は大村が言うような同一世代による埋葬を推定する。加えて血縁関係による紐帯を前提とするならば、直系3代のような直接の強い系譜関係が重視されないため、リネージのような社会組織ではないと推定する（同 pp.6）。

加えて小児棺である土器棺が、中心埋葬である木棺墓や土壙墓の外側に、時期差を持って、まともな埋葬されている場合が多いため、親子関係を否定している（同 pp.7）。

近畿地方では、成人と未成人が同一墓に葬られる多数埋葬が一般的に見られる。大庭は後期前半まで、その埋葬が重複や集積する状況を示すため、「先行する埋葬を強く意識して追葬を行った結果」であり、予定されていなかった未成人の埋葬を含むため、「一定の集団内に死者が出るたびに追葬を行った」（同 pp.7）と推定している。大庭は成人、未成人が混在し、死亡順の埋葬と重複関係を重視する埋葬方法から、「非計画型」として、被葬者を「近親関係に基づく生前の緊密な関係」に

あるものとした。

一方、後期後半（IV期後半～V期前半）以降、一定の間隔を置いて配置された、重複のない、基本的に成人のみによる複数埋葬が行われるようになる。大庭はこれを「非計画型」に対して「計画型」とし、成人への限定化と計画性から死亡順による近親関係ではなく、被葬者がより広い範囲から選別されて埋葬されたと推定する。

以上のように、大庭は多数埋葬墓は同一世代の埋葬であり、近親関係に基づく場合と選別されたメンバーによる場合があることを明らかにした。前述のような埋葬過程の復元結果と合わせて、これらが墓群形成の契機であるため、クランやサブクランといったより大きな社会組織によって造営されたと推定している。

また、前述のような大型墓の群構成の違いについても、群構成の様相から、中期の起点墓から小型墓群が多数分岐する段階から、後期の大型墓による安定した群構成へ変化したとして、集団組織の安定化と、造墓集団の範囲がより広まった結果と推定する。

大庭には、他にも多くの方形周溝墓研究をリードしてきた研究も多いものの、ここで挙げた2つの論考の間に大きな変更があるのは確かである。

大庭の研究の変化で重要な点は、方形周溝墓の諸要素について、階層化のみでの説明から、出自集団のような社会組織を前提とした説明への変更が行われた点にある。

これはその後の検討によって、後者がより実際の資料の様相に即しているとの評価があったためと考えられる。

方形周溝墓の具体的な検討から、造墓集団の社会組織が、明らかな系譜関係を直接継承するリネージではなく、クランやサブクランのようなある程度緩い出自意識を持つ集団であったとの推定に変更したのである。

居住単位である夫婦を単位としない社会組織の

様相を、資料に即した検討から具体的に描き出した点は、今後の研究の方向性を示したものとして高く評価すべきであろう。

(2) 中村大介・秋山浩三の研究

中村大介・秋山浩三は、瓜生堂遺跡の報告の中で、近畿地方の方形周溝墓を集成し、特に埋葬施設、底部穿孔土器を中心とした供献土器について検討を加えた(中村・秋山 2004)。

両氏は田中、清家らの研究を受け、同一の墳墓においては夫婦関係による埋葬は行われていないと明言している。加えて、民族誌では、「ほぼ例外なく出自集団に基礎をおいていることから」(同 pp.512)、方形周溝墓の埋葬が「最低限の理解ではあるが、出自集団であるリネージュやクラン内の分節である可能性が高い」(同 pp.512)と評価した。

方形周溝墓の造墓集団が、夫婦関係を軸とする世帯、家族によらず、出自集団によると明言したのは、田中の研究以降では、恐らく両氏が初めてなのではないだろうか。

しかし、その一方で、装身具が多く見られる加美遺跡 Y 1 号墓を、分節の中で構成された一族を同一の大規模墓に葬り続けたものとして、「リネージュもしくはクランのなかの分節で構成された一族を大きな同一墳丘に葬り続けることこそ、社会のなかで力を保有しえたことを示す証であったのではないか」とした。分節によって構成された「エリート一族」の形成を説いたのである。

また、底部穿孔土器の河内湖周辺地域におけるまとまりに、その積極的な採用から、社会全体の安定化と、「エリート一族」の形成と合わせて、その隆盛を推定している。

更に、巨摩廃寺下層遺跡 2 号墓における垂直方向の 3 次わたる拡張を、系譜関係の強化として評価した。

そして、従来の農業共同体の成長による社会発展や物資の流通における首長の関与を否定し、こ

のクラン内分節から突出した「エリート一族」の繁栄と社会の安定によって、個々の集団各々による交易の展開を推定している(同 pp.513-514)。

両氏の論説における疑問は、同一方台部に葬られる出自集団の一部が、階層的に優位にあるまとまりを持つ「一族」として独立した存在であるとするならば、それは家族による個別経営による「有力世帯」とどのように異なるのかという点である。

出自集団の表現として捉えながら、規模の大小や装身具の多寡が、権力の有無、階層の違いを示すものとして、話が入れ替わってしまっているのではないか。煎じ詰めれば、両氏が階層とは何かという規定が必要と思われる。

しかし、この点は別にしても、方形周溝墓の埋葬が出自集団を基礎として行われ、儀礼行為においてもまとまりを持つような社会組織の存在を推定した点は高く評価できよう。加えて、その集団が首長の介在なしに、安定した社会の中、個々の集団を単位として行われていたとする、従来とは異なる社会像の提出は、高く評価される。

別稿で述べるが、この交易を担う者の方形周溝墓の造営は、その造墓集団における社会的表現として、規模の大型化や副葬品の有無が要請されたと考えている。両氏の主張は筆者の主張とも重なり合うため、首肯されるものとして支持したい。

以上、本章では、大庭重信、中村大介・秋山浩三の研究について、やや詳しく見てきた。藤井が言うように、従来の枠組みを造墓集団としての出自集団という新しい集団像によって説明しようとしたと見受けられる側面は多い。

キョウダイ原理という言葉も一切見られない。

しかし、夫婦関係を軸とする共同体による個別経営という造墓集団像から、出自集団を基礎とする社会組織による造営へと大きく舵を切った点は画期的である。

特に大庭が、自らの築いてきた見解、研究姿勢を、田中の新たなモデルによる説明が、より資料

に即していると認め、それを転換した、資料に誠実であろうとする姿勢と勇氣は、敬意を表すべきものである。

両研究が、次の藤井の研究の道を整えたのは間違いでない。

5 キョウダイ原理による研究

(1) 藤井整の研究

大庭や中村らの研究を受けて、出自集団を造墓集団とする論を積極的に主導しているのが藤井整である。

藤井は、当初は世帯や家族を単位とする造墓集団像をもとに、群構成や規模の大小、埋葬施設の配置を、世帯共同体の階層の表現として捉えていた(藤井 2009 ほか)。

しかし、2010年代半ばから、加美遺跡Y1号墓や瓜生堂遺跡2号墓といった大型墓の分析を皮切りに大きく態度を改めた(藤井 2016 a・b)。

藤井は、これまで研究史の中で、有力世帯の世帯墓とされてきた瓜生堂2号、加美Y1号の両墓を、複数の出自集団を造墓集団とする共同墓地として位置づけ直したのである。

両墓にみられる埋葬の重複を、被葬者間の血縁関係に基づく密接な関係の直接的な表示とし、更に土器の他遺構間接合が認められる、藤井が「破碎散布儀礼」と呼ぶ共通した土器を分有する範囲を、埋葬施設群の一つのまとまりとした。

こうした血縁関係にあり、かつ儀礼を共有する組織形態を、「サブクランやリネージ程度の規模の集団」とした。加えて儀礼行為を可視的に相互に認識できる複数の単位を「クランと呼ばれるような集団」と推定した。

その上で、加美、瓜生堂の被葬者を、階層的な優位性を持つものではなく、そうした「それぞれの出自集団の代表者」と位置づけ直したのである。

更に、山城地域の方形周溝墓群の検討によって、そうした集団像や被葬者像が、上述の大型墓のみ

にとどまらず、一般的な方形周溝墓群においても認められると論を進めている(藤井 2017)。

本稿と直接関係するのは、群構成の過程に対する評価である。以下では、藤井 2017 の該当箇所について詳しく見ていきたい。

まず造墓集団として、「家族・世帯モデル」と「出自集団モデル」の二つのモデルを指定する。

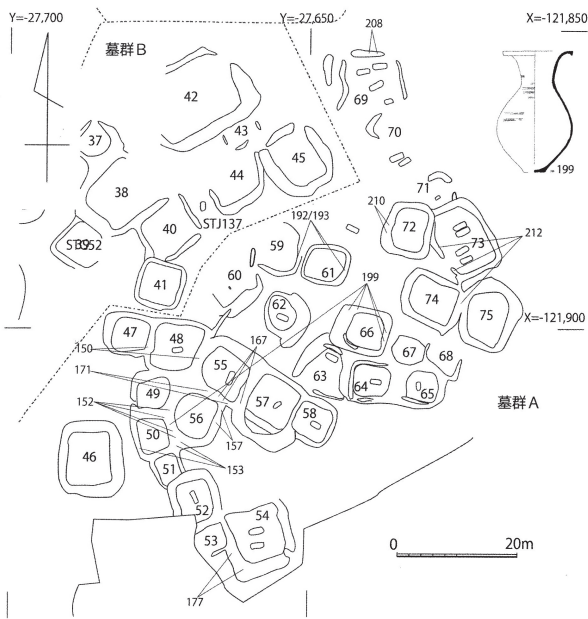
前者においては、集団の規模が小さく、独立性の高い経営単位であるため、方形周溝墓の連結(・接続：福田注)は、「累世的な造墓活動」(藤井同 pp.30)の結果とする。単位となる墓群の数は世帯数と対応し、広範囲に起点墓から継続する世代の造墓スペースを確保して造営されるため、起点墓が多く、群構成の当初は散漫な分布になると推定する。

後者においては、集団の規模が大きく、「それぞれの祖先が共通する(あるいはそう信じる)集団」(藤井同 pp.31)であり、連結はそのつながりの結果を示すものとする。そのため、単位となる連結数が多く、各々の連結する単位墓群の数が異なる。畢竟起点墓は少なくなり、連結数が多くなるため、距離をとった位置で群構成がなされると推定する。

また、大型墓については、家族・世帯モデルでは、複数の経営単位の労働の集約と評価するため階層的な優位性を持つものと解釈する。出自集団モデルでは、言明は避けるが、「同一世代を代表する者たちの墓」であり、世襲される性格のものではないとしている。

藤井は、上記の二つのモデルのいずれが実際の群構成に適合するものであるのか、具体的に自らが調査した京都府下植野南遺跡の分析によって検証する(同 pp.32-38)。

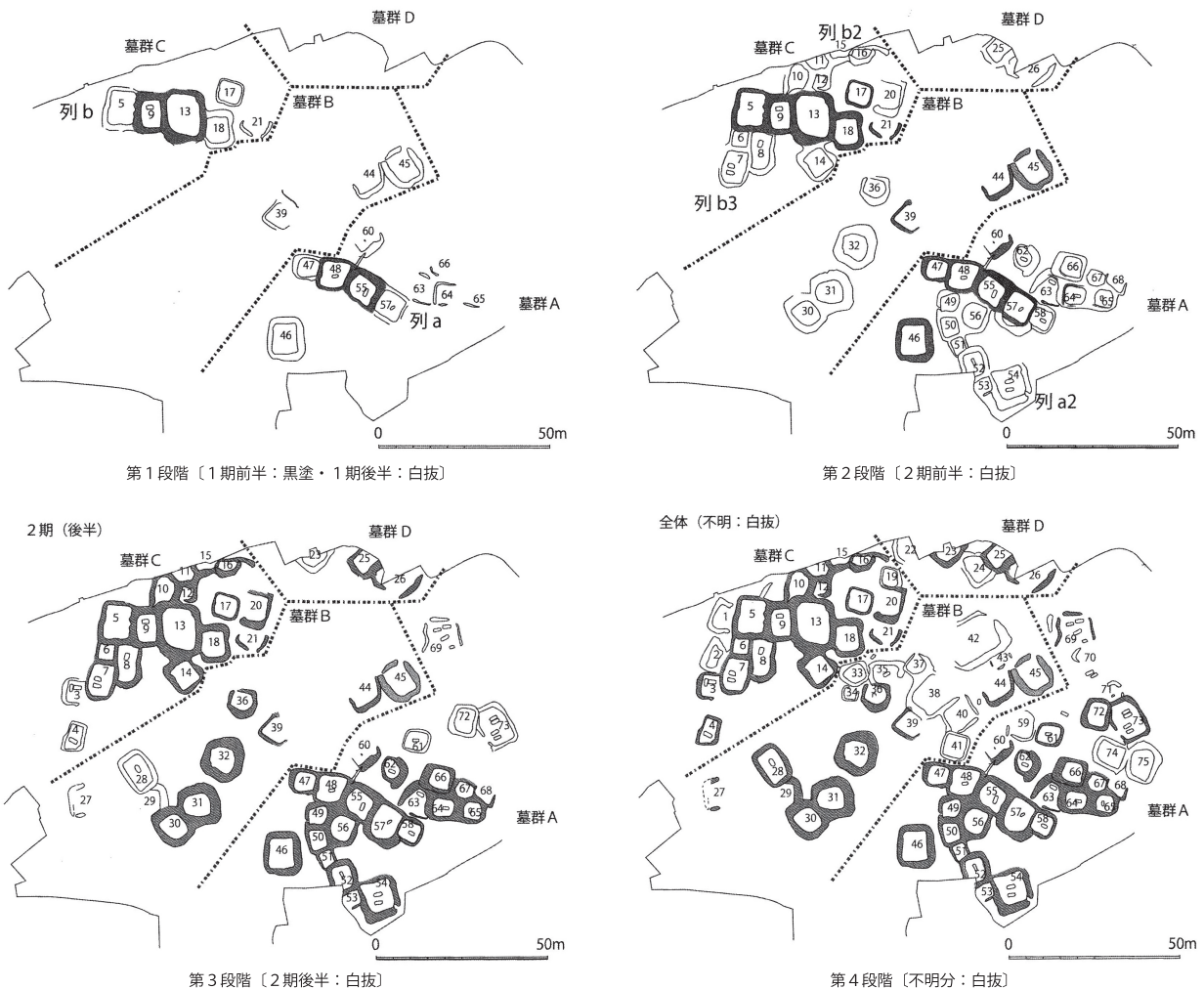
まず、「破碎散布儀礼」の範囲(第11図)が、墓群A全体の広範囲に及び、前述の「サブクランやリネージ程度の規模の集団」という範囲を示すものとする。



第 11 図 下植野南遺跡の破碎散布儀礼
(藤井 2017 より転載)

墓群の展開 (第 12 図) においては、1 期前半に距離の離れた墓群 A・C の離れた地点の列 a・b として造営が始まり、それを起点として墓群が構成されていく。特に 2 期前半の列 a 2、列 b 2 が、起点である列 a、列 b に連結する形で展開している様相、墓群が周辺に拡大していく様相は、氏の言う出自集団モデルにおける群構成の推定と合致している。氏は、この墓群の造墓集団を「クラン/サブクラン程度 of 出自集団」(同 pp.44) と位置付けている。

更に、全体の墓域を構成する複数の造墓集団間の関係性についても言及する。氏は、同一の居住域を構える複数の出自集団(クラン)によるものか、異なる居住域を設ける一つの出自集団によるものかという問いを立てた。



第 12 図 下植野南遺跡の墓群形成過程 (藤井 2017 より転載)

山城地域の当該期の墓域は、一般的に集落域のごく近傍に墓域が営まれているため、基本的にはセットとなる同一居住域による墓域の形成を推定する。

一方、集落に対して墓域の分布が必ずしも対応関係にはない場合もある。その場合、集落の存在が不明瞭な箇所で大規模な墓域が形成される点を考慮し、後者の非居住出自集団による墓域の共有も示唆している（同 pp.43-46）。

藤井は同様の作業を、岐阜県大垣市荒尾南遺跡についても行い、近畿地方と同様の墓地形成を確認している（藤井 2020）。更に「列構造の形成が、北部九州とも共通性を持つもの」として、基礎構造の共通性を説いている。

以上、藤井の論説についてまとめてきた。群構成、出土土器、赤色顔料から、方形周溝墓の造墓集団が出自集団であると明示した論説は、先の大庭と藤井に代表されよう。

大庭の項で述べたように、藤井も態度を途中で改めている。それは、大庭同様に実際の資料に誠実であろうとする姿勢の表れに違いない。

この藤井の研究については、批判があるようだが、具体的な例証を伴っておらず、その作業の有効性を否定するには至らないものと考えられる。

ただし、藤井の作業で丁寧さを欠く部分があるのも確かである。それは、例えば確実に造営単位として見受けられる2～3基のまとまりについての評価がなされていない点によく現われている。この造営単位が、起点墓にどのような規則によって接続していくのかは、造墓規則が出自による規則を反映するのであれば、重要な問題であろう。その際の「計画性」の有無についても、氏が前に造墓計画やメンバーシップについて主張していた部分との整合性や説明が求められるが、それがなされていない。詳しくは触れないが大きな問題である。

ともあれ、藤井の研究は、方形周溝墓がキョウ

ダイ原理の埋葬を基本として、クランやサブクラン規模の出自集団によって墓地が構成されているという新たな構図を具体的に示したものであるのは間違いない。

今後の方形周溝墓が造られた時代、弥生時代から古墳時代前期にかけての社会組織の復元に大きな影響を与えるものと評価されよう。

（2）前田清彦の研究

しかし、こうした新たな研究動向は、そうした研究の批判以前に俎上にも上がっていない感が強い。

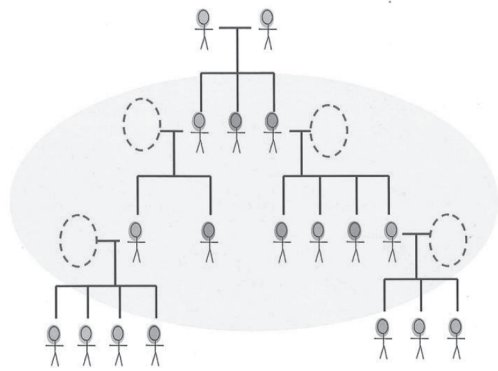
管見に触れる限りでは、方形周溝墓を検討の中心とした論考で、藤井のようにキョウダイ原理を検討の中心に据えているのは、前田清彦、岩永省三のみのように見受けられる。

前田は、田中や清家らが用いたような人骨を用いた方形周溝墓の被葬者像を、方形周溝墓の特徴の一つである「群構成」の様相から描き出そうとした（前田 2009）。

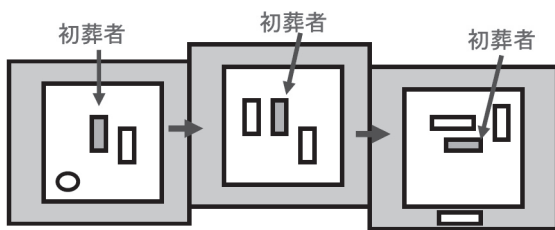
方形周溝墓は同時併存の数基が累積した集団墓である。背景には一定規模の社会集団が存在する。氏は数百基に上るような墓地でも、墓地景観が破綻せず整然としており、造営を一定のルールで行う単位群が存在するとして、その抽出を試みた（同 pp.7）。

大阪府高槻市安満遺跡、福井県敦賀市吉河遺跡、石川県金沢市七ツ塚墳墓群の検討から、周溝の連結、接続や軸方向により、いずれも2～3基から成る1単位を抽出し、しかもそれらが複数併存しているとした。氏も言うようにこうした単位の存在は、これまでも多く指摘されているところである。

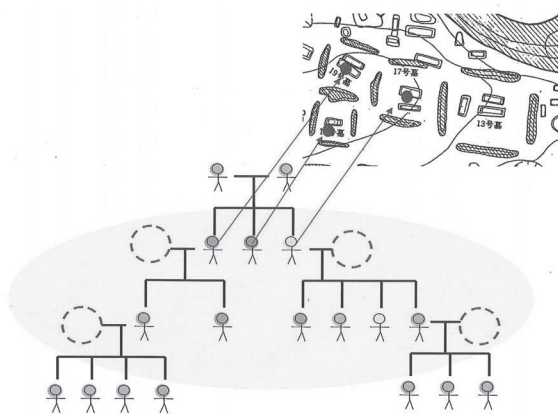
氏は、筆者が単位群におけるほぼ同時期の共通した土器使用の様相から、単位群を2～3基を単位とする、ほぼ同世代の集団墓とした結果（福田 2007 a・b）を受けて、北陸地方の単位群でも使用土器の時期差はあるが、造営期間はほぼ同時期



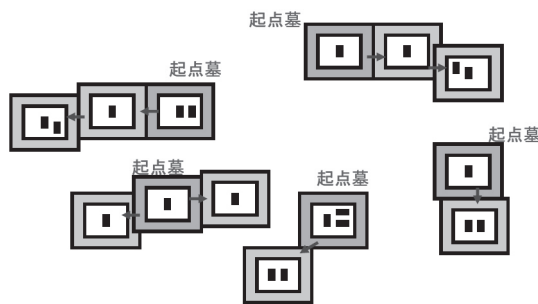
単位群被葬者のモデル



単位群の初葬者



初葬者のモデル



併存する単位群

第13図 前田による被葬者のモデル
(前田2009より転載)

で、「造営した社会集団は一定の時間を共有していた人々」とした。

具体的な単位群の中の周溝墓の間には、①大きな時期差がない。②群の中はほぼ同規模である。③ほぼ同じ平面形態が接続する。④埋葬施設、副葬品も大きな差異がない。

以上の4点から、「単位群を構成する個々の周溝墓の内容はほぼ同じと言ってよく、それらの造墓集団は同質・同規模の集団」と結論付けた。

更に前田は、前述の2(1)で引いた田中による山の神古墳群の成果を上げる。3基で合計7名、コドモ4名が葬られ、歯冠計測法によって、それらが血縁関係であり、配偶者を除いたイトコ関係を含む親族集団であるという結果に注目する。前田は、ほぼ同様の単位群で構成される方形周溝墓の被葬者の範囲もほぼ同様の範囲とした(第13図上)。

この社会集団を「多数埋葬の周溝墓で想定されている被葬者集団の範囲」として中村・秋山・大庭が想定したクラン・サブクランになぞられている。この2~3基という単位群が方形周溝墓の単位としては一般的であり、初葬者が2~3人になるような社会集団が一般的な存在であったとしたのである。

また、各々の初葬者は性別、年齢の区別がないが、それは無規則を意味するのではなく、逆に当初から埋葬されるメンバーが決定されているためとしている。そのメンバーシップは、「〇〇だからという先天的な基準、すなわち親族集団内において誰もが認識できる血縁関係から導き出される基準が存在していた」結果であり、「具体的には、同世代を生きたキョウダイ関係に相当するのではないだろうか」(同 pp.9)と推定する。

また同じ墓地に併存する単位群については、①時期差がある場合には世代が異なる。②時期差がない場合には同世代の別々の親族集団が併存して墓群を形成していたと推定している(同 pp.10)。

この前田の論文は、短文で資料の検討としては充分でないが、群構成と造墓集団の本質的な部分を突いており、問題点を浮かび上がらせた。特に方法論として、単位群の時間幅を検証して集団の性格に迫ろうとする姿勢は、後述するように筆者の方法の一部と重なっており、注目される。

しかし、まだ単位群についての検証や、具体的な計画性の検討としては不十分であり、更なる作業の継続が求められよう。

(3) 岩永省三の研究

岩永省三は、「弥生時代における首長層の成長と墳丘墓の発達」(岩永 2010) で、田中の成果を受けて、弥生時代の社会の変化と「墳丘墓・区画墓」の推移との対応について、被葬者の性格の変化を推定した。当初同一クラン内の代表者として析出されていた墳丘墓の被葬者が、気候変動や青銅器祭祀の終焉が示すようなクラン間の関係性の複雑化により、新たな結合原理を代表する人物へと性格が変化し、その結果古墳が必要となったとしたのである。

この論文は重要な論点を多く含むが、ここでは、本稿に関わる部分を取り上げる。

岩永は、これまで検証手段を持たず、作業仮設に過ぎなかった集団論を、歯冠計測法という具体的な方法をもって集団関係、墓地に現れた社会組織によって復元した田中の一連の業績を高く評価した。

岩永が引いた田中の成果は、以下のように要約できる(同 pp.18)。

北部九州では、前期から中期前半に、人口増に応じて、領域内でクランが分節し、部族が増加した。当時盛行した列状墓の造墓集団はそうした「クラン」を中心とした親族集団であり、家族のような小集団ではない。墓地の中に見える大型墓にはクランから選抜された人物が埋葬されており、大型墓は「クラン」

を束ねる部族的結合の象徴であった。

中期後半に現れる前漢鏡を副葬するような厚葬墓は、「クラン」内の階層化、序列化による「首長」への転化が進み始めたことを示している。

後期には統合規模の拡大に応じて「有力クラン」から「有力家族集団」、その中から同一世代の1～3人ほど(男女キョウダイのペアを含む)に、更に被葬者を絞り込む動きが生じ、前期古墳と同じ構成に落ち着く。

岩永は、田中の説明を、クランを中心に、その内部やクラン間の関係性の変化を反映した「絞り込み」により、古墳が成立したととらえた。

特に、単位墓やその集合を、無条件に、家族、世帯、世帯共同体に結び付け、副葬品の有無による有力家族の存在を遡らせようとする当時の主流であった学説が、田中の論理により明らかに成立しなくなったとする田中の指摘を重視した(pp.18-19)。

この認識をもとに、岩永は「絞り込み」により、墳墓が限定化されていくとして、各地の墳墓の展開を整理し、古墳への道筋を示した(pp.19-30)。

岩永の目的は、埋葬原理の変化による社会組織の変容の究明にあるのではない。各地でクランやリネージ・サブクランといった出自集団をもとに、もともと部族内の紐帯を確かめる証として墳丘墓を造るような緩い関係性を持って行われていた「被葬者の絞り込み」が、青銅器祭祀や威信材のやりとりを通して、高度な政治的交渉関係の代表、「部族間の利益を代表するような古墳の被葬者の絞り込み」に、いかに変化していったのかを描こうとしたのである。

岩永の説明は、これまでの個別経営による余剰生産と、闘争による富の収奪という共同体の成長による国家成立論とは一線を画する。クランのよ

うな出自集団をもとに、その関係性の変化により古墳への道筋を描き出すことに成功した特別なものである。

ここで確認しておきたいのは、そのような高度な政治的関係性による被葬者の絞り込みに至ったにも関わらず、それが制度化されずに、結果として各部族の連合の代表という政治的関係性が維持されたと岩永が主張している点である。

一般的な方形周溝墓とはかけ離れて「発展」していった古墳における、そうした弥生時代以来の「絞り込みの維持」は、方形周溝墓をはじめとする弥生～古墳時代の一般的な埋葬方法、墓地の形成原理に、古墳の登場がほとんど影響を及ぼさなかったことを示唆している。

本稿は方形周溝墓の造営原理としてのキョウダイ原理が、現在どのような評価を受け、それを今後の研究にいかんにかかしていかを主題としている。1で述べたような戦後考古学の科学的古墳の成立という課題に対して、岩永の田中の成果をもとに示した方法、結論はこれからの古墳成立についての研究の一つの指針になると考えられる。それは、方形周溝墓についても同様であろう。

(4) 福田の研究

筆者は「方形周溝墓における土器使用と群構成」(福田 2007)において、東京都練馬区丸山東遺跡、埼玉県さいたま市井沼方遺跡の方形周溝墓出土土器の観察と出土層位の確認を行った。その結果、個々の周溝墓と単位群を構成する周溝墓の間で、共通した製作方法、また打ち欠きなどの土器の共通した変形行為を認めた。加えて、その共通した土器が層位を違えずに出土する様相を確認した(同 pp.154-179)。

仮に単位墓群が、1基あたりに1世代、2～3基が直系3代に当たる累代墓に共通した土器を置くのであれば、出土土器の層位には大きな差が生じる筈である。しかし、実際にはほとんど層位を違えないために、親子関係は考え難い。しかも、

同一の群を構成し、共通した土器を用い、共通した土器儀礼を執行するため、緊密なつながりが考えられる。その結果、血縁関係である同世代のキョウダイ原理による造墓が最も妥当性が高いことになる。

そのため、筆者は方形周溝墓を家族墓とする評価をとりやめ、同世代による「集団墓」と指定し直した(同 pp.180)。

しかし、「家族墓」と「集団墓」の間にはそうした実態のみではなく、田中のモデルが示すようにそれが双系によるものなのか否かという評価も重要である。しかし、その点については具体的に触れ得なかった。

更に筆者は「周溝内埋葬の再検討」(福田 2016)で、周溝内埋葬の被葬者の性格を推定するために、被葬者間の関係について検討した。

まず、方形周溝墓の造営は計画的であり、当初から墓地の割り当てが行われている可能性が高い様相を、同世代によって営まれる累世墓であることに理由を求めた。方形周溝墓群を、墓域を造る当初に、同世代のそれぞれの兄弟姉妹ユニット、以下キョウダイと表記)に墓地が割り当てられたとしたのである。

また、複数埋葬については、瓜生堂遺跡の血縁関係にある中心埋葬ペアの存在からも明らかのように、世代原理が優先されるためにキョウダイが埋葬されるのを原則とし、当初から予定されていた被葬者、キョウダイを埋葬有資格者とした。

周溝内埋葬の被葬者についても、そうした世代原理の高い優先度から、中心埋葬施設の被葬者とキョウダイやイトコのような同世代の親族関係である可能性が高いと推定した。しかし、その位置は不安定な周溝内であり、藤井が言うように中心埋葬施設の被葬者とは区別されていた存在とも考えられる。

一つ一つの周溝墓における造営は、キョウダイ原理で行われている。そこには階層的な隔絶性は

なく、拡張によって周溝内埋葬を中心埋葬へと変更するように、埋葬位置による階層的な固定性はない。そのため、溝中土壙はキョウダイやイトコなどの親族の埋葬場所として、許容されていたと評価した。

筆者の提示は、土器使用と群構成の様相から各造営単位が、同世代による「集団墓」であるというものである。田中や清家らによる婚入者は帰葬され、同一の墓地を形成しないという前提に立っている。

しかし、清家が行ったような男女の組み合わせや、それが同世代であるのかという検証は十分に尽くされているとは言い難い。双系であるか否かや、どうして2～3基を単位とするか、計画的な造営とその歴史的意義をどう考えるかも問題であろう。

6 まとめにかえて

以上、方形周溝墓の埋葬原理、造墓集団、被葬者像の検討がいかに行われてきたかを概観してきた。

取り上げた各氏の論考の他にも重要な研究は多くあるが、本論の目的に沿ったものを取り上げた理解いただきたい。

戦後日本考古学を牽引してきた共同体論の影響は強く、岩永が指摘するように、田中の親族組織の提唱以降も揺り戻しのような、共同体間の闘争や余剰の争奪による政権成立という論説は多い。

筆者も、集落の単位として「単位集団」という用語を安直に使用している。それだけ、共同体論は我々に染みついているのである（福田 2012）。

しかし、研究者を自認するのであれば、最も重視しなければならないのは、理念ではなく、どのような説明が実際の資料の説明として首肯可能な妥当性を持つかであろう。この点については、既に述べている（福田 2009）。

実際の人骨という物質資料に基づく田中の埋葬

原理、それについての清家による検証と修正は、現段階では最も妥当性が高い。

しかし、定説に近い説明にまで至った「家族墓」という歴史的評価を変更するのは容易ではない。

手前味噌になるが、関東地方において従来方形周溝墓とされていたものに、相当数の周溝持建物が含まれているという認識が一般的になるのに10年以上の年月が必要であった（福田 2014）。

本稿のテーマである方形周溝墓におけるキョウダイ原理に基づく研究は、残念ながら緒についたばかりという印象が強い。

特に関東地方においては、古くからの大村の指摘を除けば、筆者が造営単位が同世代による緊密な関係にある集団墓であると指摘した他に、積極的な発言は聞かれない。

もちろん、キョウダイ原理の提唱以降も重要な報告や論考は多く見られる。しかし造墓集団についての具体的な言及は、管見に触れる限りは見られない。

この状況は程度の差こそあれ、残念ながら全国的に認められる。

筆者は何もキョウダイ原理が絶対的に正しいという立場を取るわけではない。古くに都出比呂志が指摘したように地域性の可能性もあるかもしれない。しかし、かつて述べたように、方形周溝墓という墓制を採用し、同じように穿孔壺を用いた土器儀礼を行うという「通奏低音」が響いているのであれば、検証する価値は充分にあるだろう（福田 2005）。問題は、現時点では最も妥当と考える田中のモデル I について、実際に検証する作業が蓄積されていないことにある。

もちろん人骨はないが、前田が示唆した群構成の様相や、筆者が示した出土遺物の詳細な比較検討や土器配置の検討によって、それに代わる検討は可能と考えられる。

具体的な課題をいくつか上げたい。前述のように、2～3基の基本的な単位（造墓集団）が存在

するのは間違いない。しかし、藤井の研究では、その展開図にみるように、この単位の存在が意識されていないように思える。

単に起点墓に接続するのでは、かつて大村が死亡順に造墓していくとして批判を浴びたのを思い出すべきである。単位墓群とその同時存在性、配置位置については、それがあつたものとして吟味する必要がある。

筆者や前田のみではなく、これまで指摘されたように配置計画は存在するだろう。前田が表現するように、そうでなければ景観として破綻してしまうはずである。

その計画は何によるものか、どのような必要性があつたか。どうして実行したか。計画は何を現わしているのか、その歴史的意義が改めて問われることになる。

それは当然ながら被葬者の性格とも表裏一体となって関係する。被葬者の性格、「階層」についてもその中で明らかになるものと考えられる。

それが、かつて立てた「方形周溝墓とは何か」という問いの答えにつながるであろう。

本稿は、もともと、そうした群構成や出土遺物を通した被葬者像検討の原稿の一部であつた。しかし、現在の方形周溝墓研究において、田中の提

唱したキョウダイ原理について、改めてその意義を踏まえた上で、今後の検討を進める必要を強く感じたため、別に一稿とした次第である。

多くの方々の考えに、あえて注釈をつけるような構成になっている。反論を含めて、多くの意見を頂き、議論が深められることを切望して、とりあえず稿を閉じたい。

筆者は、造営単位の同時性（もちろん各々に幅はあるが）を前提に、群構成の計画について検討を開始し、一部について発表の予定である（福田2021投稿中）。併読いただければ幸いである。

謝辞

本稿を作成するに当たり、コロナ禍のため藤井整とのネットを通じた議論に多くを学ばせていただいた。氏の方形周溝墓に取り組み真摯な姿勢は、自らのこれまでの問題を回避する姿勢を改めるのに大きな刺激となった。最新の研究成果についても多く御教示頂いた。まず氏に最大の謝意を表したい。

また、吉田稔、大谷徹、栗岡潤、魚水環、鈴木宏和、飯塚真人の各氏からも多大な御教示を頂いた。感謝したい。

引用・参考文献

- 安部みき子・山口誠治 2003「久宝寺1号墳出土の人骨について」『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書V』pp.98-100 大阪府文化財センター報告書第103集
- 岩永省三 2010「弥生時代における首長層の成長と墳丘墓の発達」『九州大学総合研究博物館研究報告』第8巻 pp.17-42 瓜生堂遺跡調査会 1981『瓜生堂遺跡Ⅲ』
- 大阪文化財協会大阪文化財研究所 2015 a『加美遺跡発掘調査報告5』
- 大阪文化財協会大阪文化財研究所 2015 b『加美遺跡発掘調査報告6』
- 大阪府文化財センター 2003『久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書V』大阪府文化財センター報告書代103集
- 大庭重信 1992「弥生時代の葬送儀礼と土器」『待兼山論叢』史学篇26 pp.89-113 大阪大学
- 1999「方形周溝墓からみた畿内弥生時代中期の階層構造」『国家形成期の考古学』pp.169-184 大阪大学考古学研究室
- 2005「方形周溝墓の埋葬原理」『考古学ジャーナル534 方形周溝墓研究の新展開』pp.5-8 ニューサイエンス社
- 大村 直 1989「考古学における家族論の方向」『史館』第21号 pp.31-33 史館同人

- 1991「方形周溝墓における未成人中心埋葬施設について—家族墓・家長墓説批判」『史館』第23号 pp.25-79 史館同人
- 1996「ムラと方形周溝墓」『関東の方形周溝墓』pp.349-364 同成社
- 岡山県教育委員会 1979『久米光成4号墳』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告30
- 近畿弥生社会の会 2007『墓制から弥生社会を考える』考古学リーダー10 六一書房
- 原始墓制研究会 1973『原始墓制研究』1—方形周溝墓研究その1—文献目録篇 原始墓制研究会
 1974『原始墓制研究』2—方形周溝墓研究その2—研究史篇上 原始墓制研究会
 1975『原始墓制研究』3—方形周溝墓研究その3—研究史篇中 原始墓制研究会
 1976『原始墓制研究』4—方形周溝墓研究その4—研究史篇 中部日本 原始墓制研究会
 1977『原始墓制研究』5—方形周溝墓研究その5—研究史篇 東日本 原始墓制研究会
- 小林行雄 1955「古墳の発生の歴史的意義」『史林』第38巻1号 pp.1-20 史学研究会
- 山東町教育委員会 1978『柿坪中山古墳群第2集』
- 梶山林継・山岸良二(編) 2005『方形周溝墓研究の今』雄山閣
- 清家 章 2010『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会(電子版)
 2018『埋葬からみた古墳時代』歴史文化ライブラリー465 吉川弘文館
- 田代克己 1982「方形周溝墓に関する一覚書」『森貞次郎博士古希記念古文化論集上巻』pp.377-383
- 立花 実・秋田かな子 2000「方形周溝墓の分析」『王子ノ台遺跡 弥生・古墳時代編』pp.628-653 東海大学校地内遺跡調査団編 東海大学出版会
- 田中良之 1995『古墳時代親族構造の研究』柏書房
 1998「山の神2・3・4号古墳被葬者の親族関係」『山の神遺跡群・池ノ迫遺跡群』pp.107-110 広島県埋蔵文化財センター調査報告書第165集
 1999「墓地からみた親族・家族」『古代史の論点2』pp.132-151 小学館(後に田中2017に再録)
 2004「親族論からみた日本考古学」『文化の多様性と日本考古学2004』pp.297-306(後に田中2017に再録)
 2006「国家形成の倭人たち」『東アジア古代国家論—プロセス、モデル、アイデンティティ—』pp.15-30 すいれん舎
 2017『骨からみた古代日本の親族・儀礼・社会—もう一人の田中良之のII—』すいれん舎
- 都出比呂志 1984「農耕社会の形成」『講座日本歴史』1原始・古代1 pp.117-158 東京大学出版会
 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
 1991「日本古代の国家形成過程論序説—前方後円墳体制の提唱」『日本史研究』343号 pp.5-39 日本史研究会
- 中村大介・秋山浩三 2004「方形周溝墓と近畿弥生社会復元への展望—瓜生堂遺跡ほか河内湖周辺における弥生墓制の位置づけ—」『瓜生堂遺跡1』pp.499-542 (財)大阪府文化財センター調査報告書第106集
- 広島県埋蔵文化財センター 1998『山の神遺跡群・池ノ迫遺跡群』pp.107-110 広島県埋蔵文化財センター調査報告書第165集
- 福田 聖 2005「方形周溝墓における共通性」『考古学ジャーナル534 方形周溝墓研究の新展開』pp.22-25 ニューサイエンス社
 2007「方形周溝墓における土器使用と群構成」『原始・古代日本の祭祀』pp.148-188 同成社
 2009「方形周溝墓の新たな儀礼論のために」『史観』第160冊 pp.90-100 早稲田大学史学会
 2014『低地遺跡から見た関東地方における古墳時代のはじまり』私家版
 2012「古墳時代前期の単位集団—集落編—」『埼玉考古』47 pp.41-57 埼玉考古学会
 2016「周溝内埋葬の再検討」『古代』第139号 pp.137-157 早稲田大学考古学会
- 藤井 整 2004『下植野南遺跡II』京都府遺跡調査報告書第35冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター

- 2009 「近畿地方弥生時代の親族集団と社会構造」 pp.40-54 『考古学研究』第 56 卷 3 号 考古学研究会
- 2016 a 「瓜生堂 2 号墓の再検討」『考古学は科学か 上巻』 pp.447-465 田中良之先生追悼論文集
- 2016 b 「加美 Y 1 号墓の再検討」『魂の考古学—豆谷和之さん追悼論文編—』 pp.353-366 豆谷和之さん追悼事業会
- 2017 「弥生墓制からみた淀川・木津川水系の集団関係」『木津川・淀川流域における弥生～古墳時代集落・墳墓の動態に関する研究』 pp.27-51 同志社大学歴史資料館調査研究報告第 14 集
- 2020 「近畿地方からみた荒尾南遺跡の墓地構造」『荒尾南遺跡を読み解く～集落・墓・生業～』第 34 回考古学研究会東海例会資料集
- 前田清彦 2009 「方形周溝墓群の造墓規格～群構成論の歴史的意義～」『金大考古』65 pp.5-10 金沢大学考古学研究室
- 山岸良二 1981 『方形周溝墓』ニューサイエンス社
- 山岸良二（編）1996 『関東の方形周溝墓』同成社
- 横浜市埋蔵文化財調査委員会 1975 『歳勝土遺跡』
- 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 1991 『大塚遺跡—弥生時代環濠集落址の発掘調査報告Ⅰ 遺構編—』
- 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター 1994 『大塚遺跡—弥生時代環濠集落址の発掘調査報告Ⅱ 遺物編—』

図版出典

- 第 1 図 瓜生堂遺跡 2 号墓（瓜生堂遺跡調査会 1981 より転載）
- 第 2 図 瓜生堂遺跡 2 号墓被葬者の家族関係想定図（田代 1982 より転載）
- 第 3 図 歳勝土遺跡のユニット推定図（都出 1984 より転載）
- 第 4 図 田中の基本モデル（田中 1995 を一部改変）
- 第 5 図 久米光成 4 号墳（田中 1995 を一部改変）
- 第 6 図 山の神古墳群被葬者の親族関係（田中 2006 より転載）
- 第 7 図 久宝寺 1 号墳の親族関係（清家 2018 を一部改変）
- 第 8 図 柿坪中山古墳群と親族関係モデル（清家 2018 を一部改変）
- 第 9 図 方形周溝墓の埋葬配列と時期変遷（大庭 1999 を一部改変）
- 第 10 図 瓜生堂 2 号墓の埋葬過程（大庭 2005 より転載）
- 第 11 図 下植野南遺跡の破碎散布儀礼（藤井 2017 より転載）
- 第 12 図 下植野南遺跡の墓群形成過程（藤井 2017 より転載）
- 第 13 図 前田による被葬者のモデル（前田 2009 より転載）

研究紀要 第35号

—設立40周年記念号—

2021

令和3年3月10日 印刷

令和3年3月18日 発行

発行 公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市船木台4丁目4番地1

<https://www.saimaibun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社